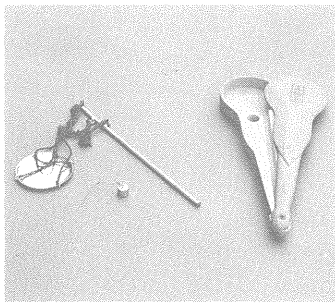


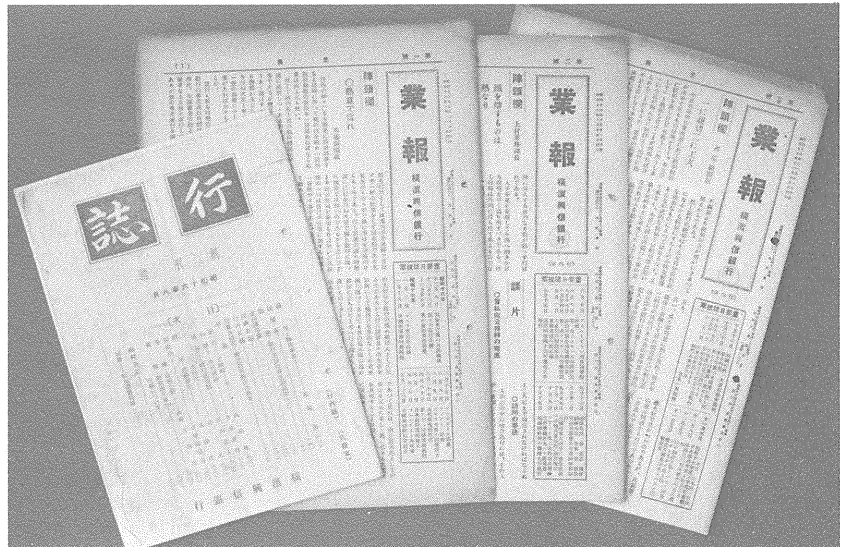
戦争遂行のため勤儉貯蓄を奨励するパンフレット・チラシ



表紙に飛行機や軍艦をあしらった預金通帳



金などの供出に使用された秤



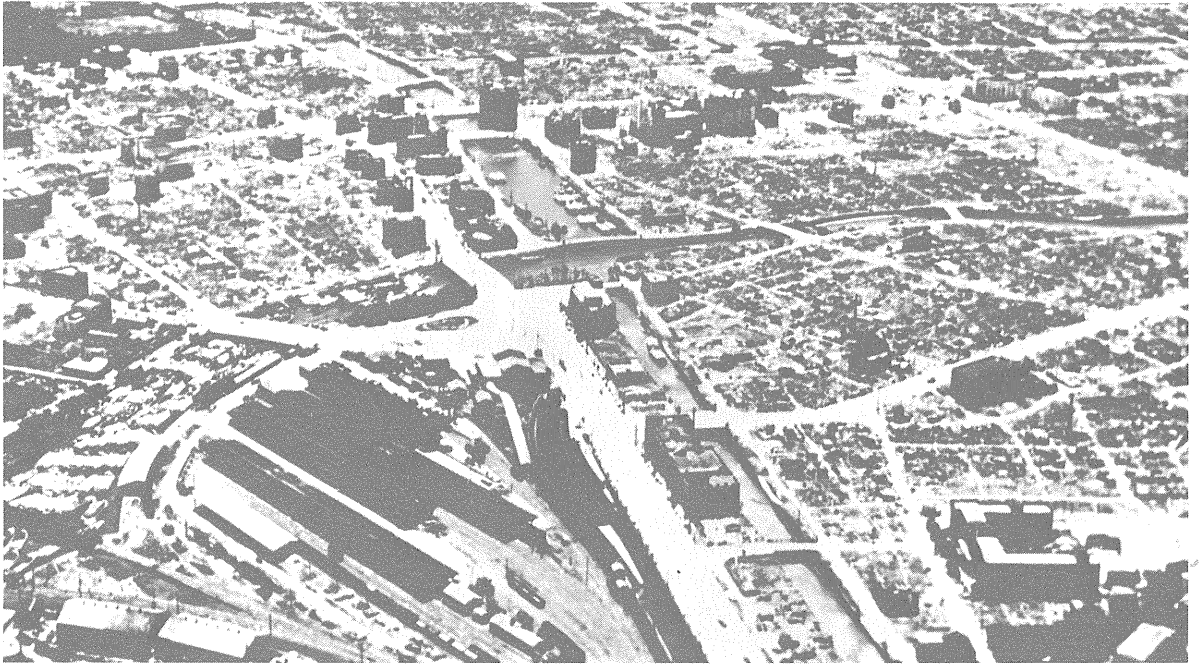
戦時中創刊されたが筆禍が相次ぎ、わずか3号で停刊となった社内報「業報」



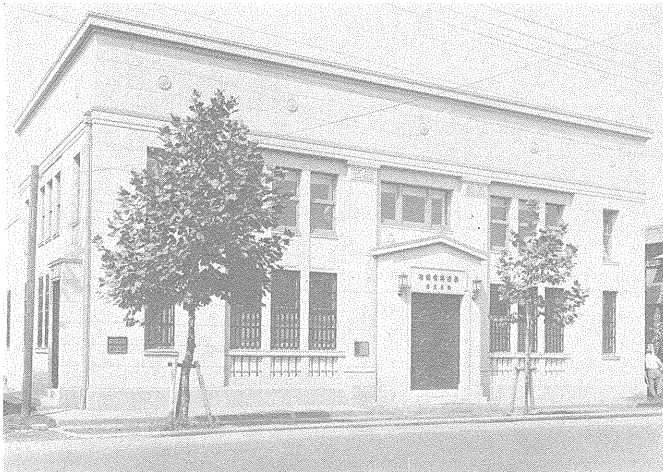
興信徒歩会による心身鍛練大山登山 戦時中の数少ないレクリエーションであった



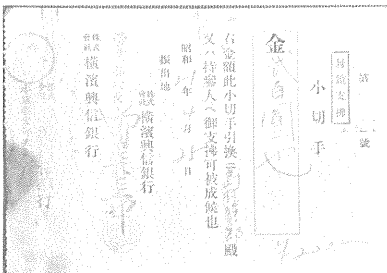
昭和20年に合同した都南貯蓄銀行の月掛貯金通帳



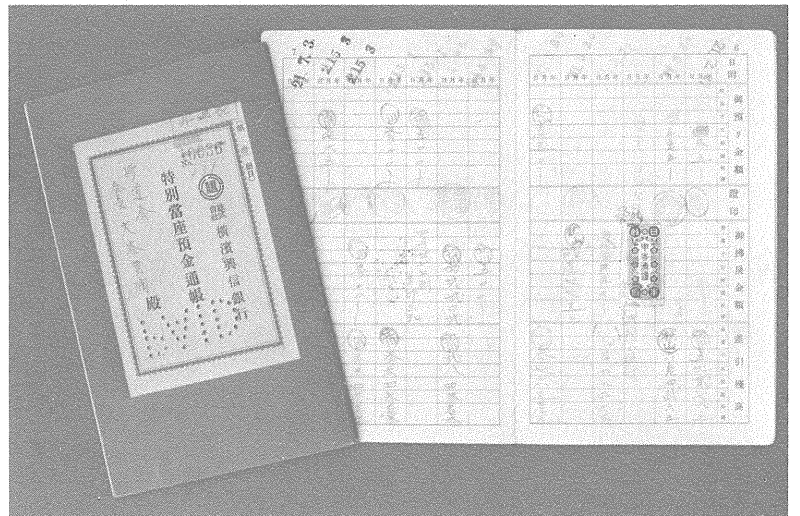
戦災によって焼土と化した横浜市内（横浜の空襲を記録する会提供）



戦災によって当行も十数か店が被災した 焼失した鶴見支店(左)と長者町支店(上)



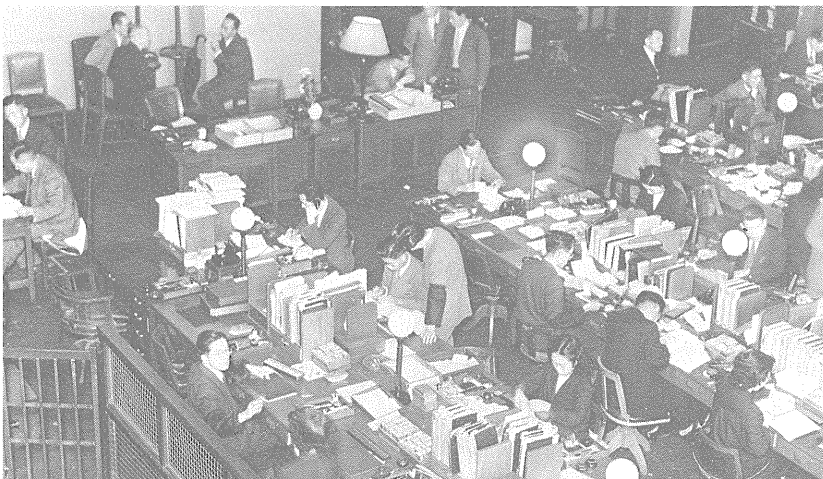
ザラ紙で作られた預金小切手 封鎖支払と印刷されており封鎖預金にしか入金できなかった



戦後の預金通帳



戦後の本店周辺 焼跡が随所に残り、人かげもまばら



当時の本店営業部

戦後の混乱

戦争は物心両面にわたって大きな傷跡を残したが、とくに地元横浜は戦災による被害に加えて、駐留軍による長期かつ大量の接収を受け、その経済復興は他都市に比べ大きく遅れをとった。こうした地元経済不振の影響を受けて、当行も雌伏の時代が続いたが、その間にも組織・機構の整備、人材の育成など将来への基礎固めを行なっていた。



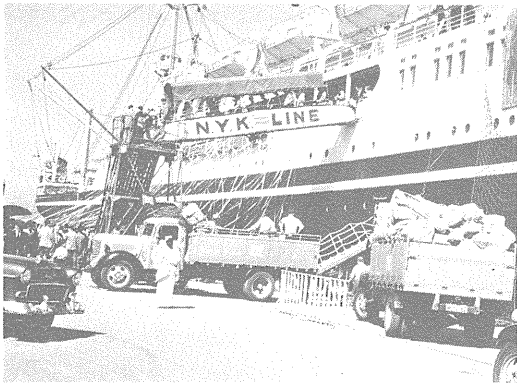
昭和28年、鶴見総持寺で行なわれた物故者慰霊祭

行名変更

昭和32年当行は横浜興信銀行から横浜銀行に行名を改めた。そしてこれを契機に厳しい環境に耐えてきた努力が実を結び始めた。復興が遅れていた地元経済も、技術革新の時代を迎えて工業化の胎動を開始した。当行はこうした環境の変化を的確にとらえて政策転換を図り、試練の時代に別れを告げ、新たな躍進の時代に向かってスタートを切った。



インフレの進行する世相を反映して「くじ付定期」がもてはやされ、当行も「福祿定期預金」と名付けてこれを取扱った。芸能人を招いて華やかに開かれたその抽せん会の一コマ

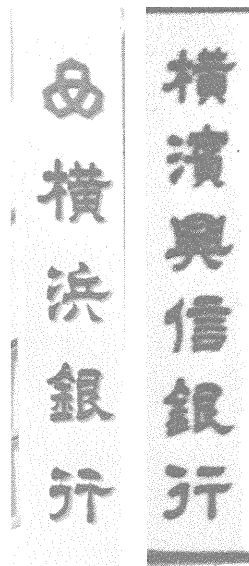


横浜港に入港した観光船での外貨両替 当時は本店営業部の男子行員が交代でこれにあたった（昭和29年8月入港のウィルソン号とその船内の両替の様様）

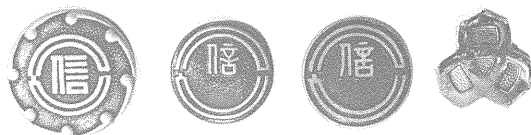


得意先係の外訪活動が活発になったのは行名変更のころであった。箱根で行なわれた第1回の推進員研修

35周年、預金400億円突破を狙って開かれた志気昂揚大会



昭和32年1月から本店の看板も新しい行章と行名に付替えられた



行名の変更に伴い、行章も現在のもの(右端)に改められた 左から
設立時~昭和16年ごろまで、~20年代後半まで、~31年までそれぞれ
使用された旧行章

業容の拡大とともに行員も増加し、本店営業場もそろそろ飽和状態



銀行店舗のない地域の顧客の利便を図るため、昭和33年相鉄・東横
の2コースで移動出張所—グリーンバス—がスタートした グリ
ーンバス(右)とその内部での営業風景(上)